

凡例（この本の使い方）

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、問題を発見し、テクストに根拠を求めて、論理的な思考を駆使しながら、読み手同士で対話し、協働して解決していくことが何よりも重要である。しかし、古典学習指導に関する参考図書のなかで、そうした新しい学習に対応したものはない。本書は、これから求められる主体的・対話的で深い学びを、古典学習でも実現したいと考える指導者のために執筆した。

◆各章段の構成

本書は、『平家物語』のうち、現行の高等学校国語科検定教科書に掲載された章段から、授業で扱われることが多いものを選び、原文・現代語訳・語注・鑑賞のヒント・鑑賞・探究のために・資料の構成で学びを深めるヒントをまとめたものである。学習者が親しみをもてるよう、各章段冒頭に、現代の言葉・語感で表したキャッチフレーズを付している。

【原文】『新編日本古典文学全集 平家物語』（市古貞次校注・訳、小学館）を参照し、適宜改めた。

【現代語訳】編著者が現代語としてのわかりやすさを重視して訳した。原文にない言葉を補った場合は（）に入れて示した。

【語注】原文の解釈に必要な最低限の語について、解説した。

【鑑賞のヒント】学習者同士の話し合い活動が行われることを意識して、解釈のポイントを発問形式で示した。

【鑑賞】鑑賞のヒントの解答例にあたる内容を解説し、対応する部分に番号を付した。その際、テクストに根拠を求めて、論理的な思考を駆使して解決していく学習者の姿をイメージしながら、できるだけわかりやすく記述した。

【探究のために】鑑賞の内容をより深めて詳細に解説した。指導者の発展的解説素材として、あるいは学習者の探究的学習素材として、利用してもらいたい。

【資料】複数の素材を比較検討して読み深めができるように、読み比べ用の古文および漢文書き下しテクストと、その現代語訳を掲げた。

◆その他

- ・コラムとして、今日的な視点からの研究テーマや、収録しなかった章段について取り上げ、『平家物語』の全体像を把握できるようにした。
- ・粗筋と年表として、章段と章段の間の粗筋と関連する歴史事項を入れた。
- ・付録として、参考文献、略系図、平安時代後期の軍装図を掲げた。
- ・引用・参照した諸本は以下の通り。引用に当たっては適宜改めた。

延慶本：『延慶本平家物語本文篇』（勉誠出版）

長門本：『長門本平家物語』（勉誠出版）

屋代本：『屋代本高野本对照平家物語』（新典社）

【四部合戦状本】：『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂）

『源平盛衰記』：『源平盛衰記』（三弥井書店）

『源平闘諍錄』：『源平闘諍錄－坂東で生まれた平家物語』（講談社学術文庫）

また現代語訳は各執筆者が行つた。右記以外のテクストは、適宜底本を選択した。

盛者必衰の理

祇園精舎・卷第一

①祇園精舎の鐘の声、^{②諸行無常の響あり。}③娑羅双樹の花の色、^{④盛者必衰の理をあらはす。}おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、^{⑦秦の趙高、漢の王莽、}^{⑧梁の周伊、唐の禄山、}是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、樂しみをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁ふる所を知らざつしかば、久しうからずして、亡じにし者どもなり。^{⑪近く本朝をうかがふに、承平の將門、}^{⑫天慶の純友、康和の義親、}^{⑬平治の信頼、}^{⑭此等はおごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、}^{⑮まだかくは六波羅の入道前太政大臣}平朝臣清盛公と申しし人の有様、伝へ承ることぞ、心も詞も及ばれね。

【現代語訳】
祇園精舎の鐘の音は、その響きによつて「諸行無常」の偈を説く。(釈迦入滅のときに、白く変化したという)娑羅双樹の花の色は、盛んな者は必ず衰える、という道理を表している。驕り高ぶつた人も、その状態が永遠に続くわけではない、それはただ春の夜の夢のようにはないものである。勢いの盛んな者もついには滅びて

門、天慶の藤原純友、康和の源義親、平治の藤原信頼、これらの人々はその心の驕慢ぶりも勢いが盛んな様子も、皆様々であつたが、つい最近のこととしては、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申した人の有様を伝聞すると、想像を絶して、それを表現する言葉も見つからないほどである。

【語注】

①祇園精舎の鐘：「祇園精舎」はインド金衛国にあつた「祇樹給孤獨園精舎」の略称。舍衛國の須達長者が祇陀太子の園林を買い取り、精舎（寺院）として釈迦に献じた。須達長者は孤独者（孤児と子供のいない老人）を哀れんだことから「給孤獨」と呼ばれ、精舎の名は祇陀太子と須達長者の二人の名をとつてゐる。釈迦は二十五年間ここに住み、布教の拠点とした。精舎の堂に病氣の僧が入る無常堂があり、僧の臨終の際、四隅にある玻璃製の鐘が鳴つて、「諸行無常」の偈（15ページ参照）を説き、僧はこれを聞いて苦惱が除かれ往生したと云う。

②諸行無常：「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為レ棄ト」（無常偈）の第一句。万物は常に生滅し、永久不変のものはないことを言う。

③娑羅双樹：釈迦が入滅する際、臥床の東西南北の四方に生えていた双生の木。「娑羅」は淡黄色の花をつける常緑の高木。高さ三十メートルに達する。釈迦が入滅したときに白く変色したと言ふ。

④盛者必衰：威勢のある者も滅びてしまう、ということ。『仁王

しまう、それは全く風の前の塵と同じである。遠く外国の例を探してみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の安禄山、これらの人々は皆、もと仕えていた君主や皇帝の政治にも従わらず、快楽を極め、人の諫言も聞き入れず、天下の乱れることも悟らずに、庶民の憂苦を顧みなかつたので、その威勢を長く保てずに、滅びてしまつた者どもある。近く我が国にその例を探してみると、承平の平将

まよ』「護国品」に「盛者必衰、実者必虚」とある。この句については探究のために参照。

⑤春の夜の夢：短くはかないことの喻え。「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ」（周防内侍・千載和歌集）卷十六・九六一）、「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかる横雲の空」（藤原定家・『新古今和歌集』卷一・三八）のよう

に、和歌でよく使われる表現。『往生講式』に「一生是風前燭、

万事皆春夜夢」とある。

⑥異朝をとぶらへば：外国の例を探してみると。

⑦秦の趙高：生年未詳（前二〇七）。秦の始皇帝の死後、二世皇帝を擁して権勢をふるつた宦官。紀元前二〇七年、三世子嬰の時誅せられた。

⑧漢の王莽：前四五～三三。前漢の成帝の外戚。孺子嬰を擁立した後殺害し、自ら皇帝を名乗り国号を「新」としたが、西暦二三年、後漢の光武帝（劉秀）に敗れ殺された。

⑨梁の周伊：朱异の誤り。四八三～五四九。南朝梁の武帝の臣。梁へ帰順した北朝東魏の侯景を見限り東魏と結んだため侯景の乱を誘発、首都建康を侯景軍に包囲される中死亡した。国を傾けた侯臣とされる。

⑩唐の禄山：安禄山。七〇五～七五七。ソグド人（イラン系）の父と突厥人（トルコ系）の母を持つ。玄宗により節度使に抜擢されだが七五五年、反乱を起こし（安史の乱）、大燕皇帝と称して一時華北の主要部を支配下に置くが、七五七年、後継問題をめぐり子の安慶緒に殺された。